

「阿波踊り」の統一的群舞への変容における「女芸」の機能

小林敦子（明治大学）

1. 本論の背景と目的

「阿波踊り」は藩政期より続く徳島城下の盆踊りで、地縁血縁による多数の集団（連）が賑やかな三味線演奏に合わせ自由に乱舞しながら、居住地域の路上を練り歩く行進型の踊りであった。徳島市民はこれらの集団が通りから出てくるのを見て楽しみ、ときには集団に混じり一緒に踊っていた。昭和初期から観光政策が始まり、道路の両側に観客席が設営された屋外演舞場と屋内舞台で、スケジュール通りに踊る形式となった。また連のコンクールや選抜大会が実施され連同士は競合する関係となった。踊りも、両手を挙げてリズムに合わせて体を揺らしながら前に進む標準的動作はありながらも自由度の高い乱舞から、「内輪の爪先立ち」で進む「女踊り」、「外輪」で進む「男踊り」、そして女性が法被を着て踊る「女ハッピー踊り」という様式が確立され、動作を揃え整然と隊形を変化させながら踊る統一的群舞となった。この「阿波踊り」の変容においては、男女差が希薄であった踊りから、女性の踊りが男性の踊りから分離し新たな「女踊り」という様式が確立し、法被装の女性の踊りが「女ハッピー踊り」として確立している（小林 2016, 2017）。本研究ではこれら「女芸」（女性による芸）による踊りの変化をたどり、「阿波踊り」の総体的変容におけるその機能を考察する。なお衣装の場合は「法被」、踊りの場合は一般的に使われている「女ハッピー踊り」で表記する。

2. 「阿波踊り」における女芸の変遷

2-1 老若男女の自由な踊り（大正期から昭和初期）

大正期から1950年代までの「阿波踊り」に関する言説および写真（徳島新聞社, 1980等）からは、当時隆盛していた花街の芸者が三味線奏者や踊り手として活躍し、一般の男女も三味線の弾けるものが多く、男女ともに幅広い年齢層が自由な踊りを享受していたことがわかる。また三味線を弾く女性と踊る男性の集団が多く、女性は踊り手としてだけでなく三味線奏者として男性の踊りを支える重要な位置づけにあった。

2-2 「女踊り」確立とその要因（1960年代）

1960年代に女性の踊りが変化し、足運びが内輪の爪先立ちをずっと保持する特徴的な様式が標準化し「女踊り」として確立し、自由度の高い「男踊り」とは対照的な踊りとなり、男女差が明確となった（表1, 写真1-2, 図1-3, 参照）。

表1「男踊り」と「女踊り」の特徴

	男踊り	女踊り
衣装	浴衣又は法被 足袋	浴衣 下駄
足運び	外輪	内輪 爪先立
自由性	やや有	ほぼ無
主力年齢	10-50代	10-30代



図1は、踊り手の年齢幅、動作の自由性、外輪の程度、腰の低さの4つの指標を示した模式図であり、これを「男踊り」で示すと各指標の程度が大きく中心から離れる図2となり、「女踊り」では図3となる。



写真1「男踊り」 写真2「女踊り」
2015, 阿波おどり会館（徳島市）, 筆者撮影

内輪の爪先立ちで進む女性は1960年代から写真で散見されるが（徳島グラフ編集室 1962：表紙等）これが標準化した大きな要因として、屋内の舞台での公演が始まり、女性の踊り手に綺麗にそろえて踊ることが求められた（阿波踊り情報誌「あわだま」編集部, 2012：23-24）ことが挙げられる。

女性の踊り手が10代後半から30代が主力となった要因としては、18-23歳ぐらいの若い女性の前景化が挙げられる。1960年代になると徳島新聞紙上の「阿波踊り」記事に於いて、阿波娘・娘踊り子などの呼称で若い女性のみが代表的踊り手として取り上げられるようになった（1967.8.18, 1969.8.15）。また「ミス阿波踊り」の選定が開始され、女性の踊りはさかんに「色っぽい」「なまめかしい」などと表現された。「ミス阿波踊り」と女優やモデルとのタイアップした写真撮影会も行われた（1967.8.16）。この時代は若者の娯楽が少なく「阿波踊り」連の入連希望者が多かったため、女性の入連には容姿による審査があったと言われる（阿波踊り情報誌「あわだま」編集部, 2012：162）。

2-3「女の男踊り」の台頭（1970年代）

女性の踊りが「女踊り」として様式化すると同時に、男性用の浴衣あるいは法被を着て自由性の高い「男踊り」をする女性が増加し「女の男踊り」と呼ばれた。「女踊り」の名手とされるS氏（1960年生まれ）によれば、「女踊り」はつま先や腕が痛くなり、編み笠を冠るなど衣装の制約も多いので敬遠されるようになった（2020.1.30 電話による聞き取り）。様式化された女性の踊りとは異なり、男性は1970年代でもかなり自由に踊っていた。例えば同一連内でも男性の場合、「どの連も踊り子それぞれが個性的な踊りを見せて」おり、ある連では「頬被りで踊る人もいれば提灯を手に踊る人もいた」（南 2015：61）とされる。男性用の浴衣を着て踊るある女性の写真には「陶醉境」とキャプションが付けられており（『徳島新聞』1963.9.1）、様式にとらわれない「男踊り」の自由性を享受していたことが伺える。すなわちこの時代の女芸は、様式化された「女踊り」に加え、男性に交じっての自由な「男踊り」である。

2-4「女ハッピー踊り」の確立（1980-2000年代）・「男踊り」の統一化

しかし1980年代になると、「男踊り」をする女性に色鮮やかな特注法被を着せ、グループとしてまとまりのある踊りをさせる連が複数登場した。これは「阿波踊り」全体が統一的な群舞に変化していく過程で、やや無秩序的であった「女の男踊り」が統一的な群舞の1グループとして位置づけられていったとみることができる。この形態は踊り手と観客双方に人気となり取り入れる連が増加し、2000年代初期に「女ハッピー踊り」という呼称が定着する。この踊りは『徳島新聞』紙上では「娘さんの色っぽさ」（1968年8月15日）、「（筆者注：胸に）巻いたサラシに色気がにおう」（1976年8月13日）、「女踊りにはないお色気」（1979年8月13日）など身体の露出によるセクシュアリティを見出す言説が多いが、踊り手自身は、「自由奔放な表現力」（徳島グラフ編集室 2007：81）や「自分らしさを出せる」（ibid 2007：31）など、「一糸乱れぬ」と形容される程に統一性が重視される「女踊り」とは別の、個人芸とされる「男踊り」本来の魅力を感じていたことがわかる。この時期の「女芸」は様式化された「女踊り」と、ある程度様式化されているが「女踊り」よりは自由性がある「女ハッピー踊り」である。また「女踊り」に整然とした隊列変化が導入された1980年代には「男踊り」も手に持つものや足運びを揃え、「女踊り」の隊列に呼応するように隊形を組み、自由性を残しながらも統一的な群舞に変容していった（小林 2017：7）。

2-5「女ハッピー踊り」の多様化（1990-2000年代）

「女ハッピー踊り」を取り入れる連が増加する過程において、各連で「女ハッピー踊り」に「女踊り」のいろいろな特徴を取り入れた多様なスタイルが登場している。これは、「女ハッピー踊り」を「男踊り」としてではなく、女性の踊りとして、また統一的群舞としての「阿波踊り」の1パートとしてみる視線によるものと

考えられる。写真3-5は代表的な3つの連の「女ハッピー踊り」であり、図4-6は図1に基づき各連の踊りの特徴を示した模式図である。この模式図によれば、「男踊り」は4つの指標がいずれも大きく、「女踊り」はいずれも小さく対照的となる（図1-3）。しかしA連では外輪の程度や腰の低さは「男踊り」程ではないが全体としては「男踊り」に近く、B連では外輪の程度と腰の低さは「男踊り」そのものであるが動作の自由性が全くなく、C連ではそもそも外輪ではなく腰もあまり低くなく「女踊り」に近い特徴がある。ここでは、各連とも「女ハッピー踊り」を、揃いの衣装と踊りの特徴により連の独自性を打ち出し、統一的群舞における1パートとして位置づけている点に着目しておきたい。すなわち2000年代以降の「女芸」は、「女踊り」および「女ハッピー踊り」となる。なおこの時代に女性が男性用の浴衣を着て踊る例も散見されるが、本論では言及しないこととする。



写真3 A連



図4



写真4 B連



図5



写真5 C連



図6

写真3: 2015, 阿波おどり会館(徳島市), 筆者撮影

写真4, 5: 各連より提供

3 結論

観光政策により観客に見られるようになった「阿波踊り」において、まず女性の踊り手への視線が女性の踊りを様式化させ、一部の女性はこれにあらがうように自由な「男踊り」を求めたが、やがて「女の男踊り」も様式化した。また「女踊り」に整然とした隊形変化が導入されると、「男踊り」もそれに呼応する形で統一化が進んだ。「阿波踊り」における「女芸」の変遷をたどると、三味線奏者としての位置づけは変わらないが、「女芸」の様式化や整然とした隊形変化に牽引されるようにして、「阿波踊り」全体の統一的群舞への変容に寄与したと言えるであろう。

引用文献リスト

阿波踊り情報誌「あわだま」編集部, 2012, 『流儀伝承』, 徳島: 猿楽社

小林敦子

2016, 「『阿波踊り』における『女踊り』の確立と『女の男踊り』の台頭」, 『舞踊学』 No.39, 舞踊学会, 9-17

2017, 「阿波踊りの統一的群舞への変容」, 『比較舞踊研究』 No.23, 比較舞踊学会, 1-11

南和秀, 2015, 『阿波楽』, 徳島: 猿楽社

徳島グラフ編集室, 1962/2007, 『徳島グラフ』, 徳島: 徳島出版

徳島新聞社, 1980, 『阿波おどり』

徳島新聞社, 『徳島新聞』

1963.9.1 朝刊5面「初日から踊り一色」, 1967.8.16 朝刊1面「美と興奮を写そう」

1967.8.18 朝刊1面「踊る阿波娘」, 朝刊16面「工場内で踊る東邦連の娘踊り子たち」

1968.8.15 夕刊1面「初踊り繰り出す」, 1969.8.15 夕刊1面「阿波娘男踊りですべり出し」

1976.8.13 朝刊13面「待ってたハッスル」, 1979.8.13 朝刊5面「跳んで! 跳んで! 踊って!」